生徒向け校長通信 ～ 名言にちなんだエッセイです

あうん　教師と生徒・保護者があうんの呼吸で教育ができることを願って‥‥　第　３３　号　令和５年７月２４日

君らの場合は何もしないでくれる優しさなんだよな。それって大人だと思うんだ。

恩田陸『夜のピクニック』

高校生活最後を飾るイベント「歩行祭」。それは全校生徒が夜を徹して80キロ歩き通すという、北高の伝統行事だった。甲田貴子は密かな誓いを胸に抱いて、歩行祭にのぞんだ。三年間、誰にも言えなかった秘密を清算するために――。学校生活の思い出や卒業後の夢など語らいつつ、親友たちと歩きながらも、貴子だけは、小さな賭けに胸を焦がしていた。本屋大賞を受賞した永遠の青春小説。

（Amazon「本の内容」から転載）

教員になって初めて赴任した僕の机に柔道着と黒帯が置かれていた。柔道部顧問になることは事前に知らされていた。「僕は黒帯じゃないですよ。」と言ったら、体育科主任に「生徒になめられるから黒帯していけ！」と言われた。その忠告に従わず白帯のまま格技場に入った。どんな顧問が来るのだろうと期待していた生徒たちは落胆なのか安堵なのかわからない笑みを浮かべ、主将の N 君はひたすら僕にやさしく柔道を教えてくれた。短い春休みが終わると僕は新入生３人と一緒に練習を始めることになった。そのうち一人は退部してしまったが、僕を含めた同期生３人は一緒に昇段試験を受け、一番最後に僕が黒帯となった。それでも２年春までは互角の勝負だった。それが秋を迎える頃には全く歯が立たなくなり、僕はもっぱら新入生の稽古相手となっていった。迎えた同期生最後の高体連。団体戦ではすぐに敗退したものの、個人戦では１人が全道代表決定戦に勝ち進んだ。拮抗（きっこう）したいい勝負だった。しかし判定で負けた。タオルで顔を覆い、真っ赤な目をした彼に僕は「惜しかったな」と声を掛けた。彼は小さな声で「簡単に言うな」とつぶやいて選手控え室に消えた。

勝ち負けがある部活動の世界は、優勝したもの以外は皆、敗者となる。この痛みを知ることで人は成長する、とわかってはいるが、負けた生徒たち、特にそこで部活動を終える３年生を迎えるのは顧問として辛い仕事だ。僕自身は競技者としてスポーツをした経験がなく、指導者としての力量不足を引け目として感じていたからなおさらだったのかもしれない。顧問が僕じゃなかったらもっと伸ばしてあげられたのではないか。ついそう思ってしまう。そのうえ僕たち教師は常に与えることを使命と考えがちだ。教えてやろう。支えてあげよう。困っていたら手助けしてあげよう。負けた生徒を慰め、次の人生に向かわせるよう激励の言葉を贈らなくては…。そういう葛藤の中で、毎年高校生活最後の敗戦に立ち会ってきた。

『夜のピクニック』で恩田陸さんはこんなふうに登場人物に言わせている。

「大体、俺らみたいなガキの優しさってプラスの優しさじゃん。何かしてあげるとか、文字通り何かあげるとかさ。でも君らの場合は何もしないでくれる優しさなんだよな。それって大人だと思うんだ。」

あの時、気持ちの整理がつくまで何もせず待ってあげられたらどうだったんだろうか。あの頃の僕は「何もしない優しさ」をもっていなかったんだな。ちょっと切なくなる。

僕は今、高校生活最後の敗者たちを直接迎えることはない。でも、これだけは伝えたい。

間違いなくその負けは君の財産です。最後の場面までやれたってことが君の強さです。人生に幸あれ！